



TITLE:

新時期文學における愛の諸相

AUTHOR(S):

三枝, 裕美

---

CITATION:

三枝, 裕美. 新時期文學における愛の諸相. 中國文學報 1993, 46: 99-133

ISSUE DATE:

1993-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177538>

RIGHT:

## 新時期文學における愛の諸相

三 枝 裕 美

京都大學

### 序

中國における愛情文學の歴史は古い。唐代傳奇、白話小説、近・現代小説の中で脈脈と息づいてきた。それは士大夫の正統文學の系譜からははずれていたとはいへ、名作「紅樓夢」が今でも高い人氣を誇るように、人々に愛され續けてきたのである。毛澤東の「文藝講話」以後は文藝は政治に奉仕しなければならないという枠がはめられ、愛情小説も共産黨や社會主義の政治的理念に沿うように描かなければならなくなったが、消滅したわけではなかった。ところが文化大革命の極端にストイックな運動の中で、愛情はおろか、文學・藝術そのものが許されざるものとなって

新時期文學における愛の諸相（三枝）

しまった。迫害されて監禁されたり命を落とした作家や藝術家も数多い。その不毛の地獄から再出發したのが新時期文學である。文革中タブーとされてきた愛も息を吹き返した。小論ではまず前半で、新時期の愛情文學の中からこの十數年の愛の描かれ方の變化を見ることのできる特徴的な幾つかの作品を取り上げて變遷をたどり、後半では時間の枠を取り拂って、愛と愛を妨げるものとの對立を軸としたパターン別に分類整理して、様々な愛の在り方に迫ってみたい。

### 一 新時期愛情文學の變遷

#### （一）淡泊な愛

——池莉「愛を語らず」と徐星  
「主題のない變奏曲」——

まずごく最近のものから見てみよう。近年中國で注目されるようになった作家に池莉<sup>①</sup>という女性がいる。彼女の作品に、「愛を語らず」（原題「不談愛情」『上海文學』八九年一期）という中篇小説がある。題名からも想像されるように

愛のない結婚がテーマである。漢口の花柳街生れの娘が、知識分子家庭出身で優秀な外科醫と知り合い、男の親の反對を押し切って結婚するという話だが、こういう設定から身分を越えて愛を貫くといった純愛物語を期待してはならない。物語はそもそもすまじい夫婦喧嘩で幕を開ける。

妻は實家へ歸り、喧嘩は雙方の親・友人・職場を巻き込んで大騒動になりかけるが、原因は夫が妻の妊娠に氣が付かずテレビのスポーツ觀戰に熱中していたというたわいもないことであった。離婚すると夫のアメリカ行きに差し障る（單身者は身輕なので歸國しない恐れがあるから）とわかると、男の親が初めて花柳街を訪れて、事態はにわかには解決する。このカップルにとって愛はそもそも存在しなかったのだ。主人公の外科醫莊建非にとって、結婚は、

「聖人君子とちんぴらとの間には、ただ前者が自慰を経てから結婚を望むのにたいして、後者は強姦や亂交に發展するという違いがあるだけである。莊建非は君子だったので、結婚を選んだ。」

と言うように、性欲を満たす合法的手段でしかない。女の

方も計算づくで近付いて結婚に持ち込んだのである。結婚が愛情に基づくという意識はなく、まるで感覺が麻痺してしまったかのように、愛のない結婚を不幸とも思っていない。

この「愛を語らず」は池莉の出世作である中篇小説「煩わしき人生」（原題「煩惱人生」『上海文學』八七年八期）の續作である。このあとの同じく中篇「太陽の誕生」（原題「太陽出世」『鍾山』九〇年四期）とともに、武漢を舞臺とした人生喜劇三部作を構成する。最初の「煩わしき人生」で愛情はどのように描かれていたかを振り返ってみよう。

「煩わしき人生」は漢口のある男の戦争のような長い長い一日を描く。絶え間ない瑣事に迫られる毎日の生活のわずらわしさそのものを題材にしており、その意味ではこれまでの現當代文學にあまり見られなかった、新鮮な作品である。<sup>②</sup>住宅難、通勤難等の中國の生活の不便さが背景にあるとしても、生活に迫られて生きる空しさは現代社會で普遍性を持っており、それを文學に結晶させた意義は大きい。

こんなあくせくした日々の中で、美しい愛は下放時代の思  
い出として主人公印家厚の心の奥底に仕舞いこまれてしま  
う。疲れ果てて歸宅した利那に彼の胸をよぎるのは、

「これこそが最も幸せな時間ではないか。彼の家、彼  
の女房！ たとえやつれた、しょっちゅういがみあい  
をしている女房であつても！ この時、月あかりの下  
でささやく愛、微妙な心の絆なんか、この饑え疲労困  
憊した男からはるか遠くへ去っていつてしまった」

という思いであつた。これが現實というものであろうか。  
疲れた心身を休める場でしかない家庭をえぐる作者の目は  
鋭く容赦ない。さらにこのあと彼は、別の二人の女性（一  
人は彼に好意を持つ同僚、一人は下放時代の戀人によく似た幼稚  
園の先生）の顔を思い浮かべながら、寝ている女房の頬をはた  
いて肉體を求める。たしかに池莉はこの作品で世間の夫婦  
の實態の一面を突こうとしているが、ここには愛の生きて  
ゆく餘地がないことも事實である。それゆえ「どうして婚  
姻と愛情とは全く別のことなのだろう」という印家厚のつ  
ぶやきは妙に説得力を持っている。

新時期文學における愛の諸相（三枝）

三作目の「太陽の誕生」は結婚・妊娠・出産・育児と續  
くある夫婦の物語である。この夫婦は、始終喧嘩しながら  
も協力して子育てにつとめ、破局には到らない。しかし大  
きく心がすれちがう時が二回あつた。最初は妻のつわりが  
ひどい時、

「わめいてやる！ 全世界の人間に聞かせてやるんだ。  
女房が妊娠して苦しんでいるのに、亭主の野郎はそれ  
をいいことに自分だけ良い目をして！」

夫は別にやましいことをしているわけではない。仕事が順  
調なだけである。しかし自分だけ仕事で充實しているのが  
妻の氣に食わない。夫にとって妻の怒りは不可解だ。二度  
目は出産後育児ノイローゼ氣味の時、

「あんたは毎日良い知らせがあるわよ。ボーナスが出  
た。目標を達成した。製品が某國の市場に進出した。  
試合に勝った。大學に行くようになった。私はどうな  
の。私も毎日良いニュースがあるわ。朝陽（赤ん坊の名  
前）が指を噛まなくなった。小菊（ベビー・シッターの名  
前）が醬油を買いに行つて、一圓よけいにおつりを貰

ってきた。朝陽がおむつを三枚しか濡らさなくなった。抱えて五回おしっこするようになった。朝陽の大便は一日二回から一回になった。軟らかくて、黄色くて、棒状で、臭くて。なんていい知らせなんでしょう。あなたの娘は大人の排泄をするようになったのよ。」

これは決して妻が子供をうとましく思っているのではない。自分が赤ん坊の世話にかかりつきりになっている間に、夫だけが外の社會でどんな進展があるのを目の當たりにして、自分が埋没してしまいそうな焦躁感に囚われているのだ。小説の中の夫は、妻の自己喪失の苦しみを理解することなく、公園に散歩に行つて同じくらいの子供を持つ母親たちと友達になるよう勧める。確かにそれにより彼女の育児ノイローゼは解消されたのだから、良い解決方法であつたことには違いない。小説はここで終わるのだが、夫婦の關係、二人の愛という點で考えるならば、この二度のささやかなすれちがいは將來に龜裂の危険を孕んでいる。

池莉の三部作を見てきたが、どれも愛情を問題にしない現代の結婚生活ばかりである。それでも日々の暮らしはあ

たふたと過ぎてゆく。ここには美しい愛、理想の愛を希求する姿勢すらない。

また一方でもっと若い世代の作家、例えば一九五六年生れの徐星は、處女作の短篇小説「主題のない變奏曲」（原題「無主題變奏」『人民文學』八五年七期）で都會の若者の虛無的な心情をさらりと書く。

彼女の名前が老Qだと知る前に、その晩、俺たちは同じスピードで「愛」の最高峰に到達した。

「私、老Qっていうの。」彼女は淡々と名を告げると、もつれたブラジャーの紐を留め直しながら、ゆっくりと言った。「この段階にならないと、お互いに本當に理解できっこないみたいね、そうでしょ。」

という具合に、主人公の私と戀人の老Qは相手の名前さえ知らないまま知り合つたその晩に肉體關係を結ぶ。しかし大學中退で作家志望、一流レストランのウェイターを勤める主人公の男は、何かを待ちつつ何にも期待できないという屈折した心理で、自信はあるくせにどうせ見込みはない

と投げやりになっている。老Qの方は何とか彼を成功させたいと勵ますのだが、あまりにも無氣力な男に愛想を盡かして別れる。その際も別れるべくして別れたという感じで、實にあつさりとしている。「主題のない變奏曲」の續篇と讀める、翌年のごく短い小説「殉道者」(『人民文學』八六年十二月)は、この別れた戀人たちを思わせる男女が十年後に偶然再會するというもので、十年前の別れの場面の回想が挟みこまれる。再會しても二人の心はすれちがっていることを確認しただけだった。

## (二) 蘇った愛

——劉心武「愛情の位置」と

張抗抗「愛する權利」——

いま、ごく最近の池莉と徐星の小説に描かれた男女の有様を見てきたが、新時期文學十數年の歩みの中で、最初からこれらのように文學が愛にたいして淡泊だったわけでは決してない。文革で愛情という言葉を口にするのさえはばかられるほど禁壓され、まったくゼロの地點からスタートした皮切りの作品を見てみよう。まずこのタブーを破って

愛の領域に踏み込んだのは、劉心武<sup>③</sup>の短篇小説「愛情の位置」(原題「愛情的位置」『十月』七八年一期)であった。

小説の内容は、若い二人の出會いから彼らが愛を育んでいく過程を描いたものである。圖書館で一緒に本を讀み、書物から目を移した見つめあいの中に思いを交わすデート。同僚の女性の打算的な結婚觀を排し、「あんた中風のお姑さんの下の世話をする嫁になりたいの?」という忠告にも耳を貸さず、相手の男性が安食堂のしがない烙餅焼きであるということも氣にしない、模範的戀愛である。しかし彼女は愛情と革命とのあるべき關係についての悩み、すなわち愛情自體は健全なものであっても戀愛にうつつをぬかすことが革命遂行の妨げになるのではないかとの疑念を抱く。それに對しては夫を國民黨に殺され一生を革命に捧げてきた老婦人を登場させ、革命運動の中で二人は熱烈に愛し合ひ、それはむしろ革命への情熱を掻き立てたのだと語らせ、愛情は革命家の生活の中で重要な位置を占めるべきだという解答を與えている。

劉心武はこの小説で愛情をタブーから引き出し、當時の

風潮であつた金錢至上主義的戀愛觀を排して健康的で美しい眞の愛を求めるよう青年たちに呼びかけ、正しい戀愛の道へ教へ導こうとしたのである。

「愛情の位置」は七八年七月二〇日から二十三日まで四日連續でラジオドラマとして放送された。その反響はすこぶる大きく、後に劉心武は『愛情小説選』の序文の中で、

「一九七八年の秋、ある若者が外から歸つてきて戸を開けると弟と妹が机の前に座つて放送を聞いていた。

ラジオからはちょうど『愛情』の類の言葉が流れていて、彼はびっくり仰天した。後で私に手紙をくれて當時の心境を形容して言うには、『まったく政變が起つたのかと思ひましたよ。』その時放送局が流していたのは私の短篇小説『愛情の位置』でした。小説の發表とラジオ放送の後私は七千通の讀者の方々からの手紙を受け取りました。<sup>④</sup>」

と語っている。愛情を押さえつけられてきた人々がいかに大きな驚きを持つてこの小説を迎えたかがわらう。<sup>⑤</sup>これほど大きな反響を呼んだことで劉心武の目的は半ば達せら

れたといつてよい。しかし文學史的意義は大きくても、小説自体は意圖が明確すぎてまるで教科書のものであり、文學作品としての水準は低いと言わざるをえない。それは劉心武自身も自覺しており、今人々が求めているのは充分に文學を楽しむことであるという理由から、上に序文を引用した『愛情小説選』では、自分の「愛情の位置」を外している。彼のものでは新時期文學全體の出發點と評價される「クラス擔任」（原題「班主任」）『人民文學』七七年十一月）の方がまだしも説教臭さがなく、優等生と不良少年に共通する精神の歪みという盲點を突いた衝擊性において勝っている。無論後の劉心武は紀實小説の新しい試みなどで筆の冴えを見せるようになるのだが。

こうして出發した新時期の愛情文學だが、翌年張抗抗<sup>⑥</sup>が短篇小説「愛する權利」（原題「愛的權利」）『收穫』七九年二期）で、新しい時代を迎えつつあるという轉換點の認識の上に立つて、文革によつて奪われていた人々の愛する權利を取り戻そうと訴えた。小説の主人公は舒貝、舒莫の若い姉弟

である。彼らの父はバイオリニストで音楽大學の教授、母はソ連に留學した經驗を持つソプラノ歌手だったが、ともに文革中に迫害を受ける。父親は二年間「牛棚」に入れられ、母親はスパイの濡れぎぬを着せられて自殺していた。

父は二年前「弟の莫は二度と音楽はやらぬこと、姉の貝は結婚をするなら必ず労働者を夫とすること」という遺言を残して病死した。ところがまもなく四人組が打倒されたため弟はまたバイオリンを始めるが、姉は文革中に受けた深い心の痛手が障害となつて、ひそかに愛する知識人の男性に容易に心を開くことができない。「なぜ僕は僕の愛する仕事をしてはならず、姉さんは愛する人を愛してはいけないんだ。」もはや以前とは違う新しい時代に入ったのだという弟の信念は、姉を突き動かし、彼女もやがて心の扉を開きはじめた。

張抗抗は自傳の中で、

「私は私の心の中の新しい時代に呼び醒まされた愛を全部注ぎ込みました。」「一人の人間が何を愛そうと阻むことはできないものです。」<sup>⑦</sup>

新时期文學における愛の諸相（三枝）

と語っている。彼女は戀愛であれ個人の嗜好であれ、愛にたいして全幅の信頼を寄せ、政治が愛に介入し抑壓するのを拒否し、愛の成就へ向けて理想と情熱を注ぎ込んでいる。「愛する權利」の段階ではまだ硬さが残っているが、翌年の「夏」（『人民文學』八〇年五期）では人間の個性を封じ込めようとする社會に反發する、みずみずしい若者像を描き出して注目されるようになる。

劉心武の「愛情の位置」では、愛という言葉に耳にするだけでも恐ろしいという地點から出發したが、僅か一年で聲高に愛する權利を主張する作品が出現したということは、人々の間で愛への渴望が如何に強いものであつたかを示している。

### （三）眞實の愛

——張潔「愛、忘れがたきもの」——

劉心武と張抗抗が文學の中に愛を復活させ始めて間もない頃、七九年十月から十一月にかけて實に十九年ぶりに文學藝術工作者第四次代表大會が開かれ、鄧小平が文學に對する干涉を否定するなど、思想解放ムードが高まる中で、



張潔<sup>⑧</sup>の短篇小説「愛、忘れがたきもの」(原題「愛、是不能忘記的」『北京文藝』七九年十一期)は、愛のない結婚と婚姻外の愛を描き、その賛否を巡って激しい論争を巻き起こした。<sup>⑨</sup>

物語は珊瑚という女性が亡き母を回想する形で語られる。自分の遺骸と一緒に茶毗に付してくれと母が遺言した「愛、忘れがたきもの」と書かれたノートには、ある男性に對する母の二十數年間にわたる愛と苦惱が綴られていた。その男性は文革中に非業の死を遂げたが、その後も母はノートに語り続け、最後は天國で一緒になりましようと言き残して死んでいった。實は珊瑚の母は周囲の勧めるままに愛情のない結婚をし、珊瑚が幼い頃に離婚していた。母がノートの中で愛し続けた男性の方も別の女性と結婚していた。その男性は解放前に上海で地下活動をしていたのだが、ある労働者が彼を救うために犠牲となって娘が一人残され、彼は道義的責任と階級的友愛からその娘と結婚していたのだ。『もう一人の人間の幸福のために、彼らは自分の愛情を切り捨てざるを得なかった』のである。珊瑚は、「世

間の法律やモラルなどというもののために、二人はこの世では結ばれなかった。そして一度も手を握ることさえなかったけれども、彼らは完全に相手を自分のものにした。」と確信する。彼女は二度と母のような悲劇を繰り返さぬよう、眞に愛し合える人が現れるまでは愛情のない結婚などすまいと決心する。

この小説はどのような理由であれ周囲からの壓力のままに結ばれた結婚を批判し、眞實の愛があるのに結婚できないという不條理を訴えたものと讀める。婚姻道德と愛情の問題を考えさせる内容の深さにおいて、新時期の愛情文學を眞に打ち建てたものと今では高く評價されている。面白いことにこの十年の間に時代は急速に進み、今ではこの小説が不道德であるとは感じられなくなってしまった。劉心武はこういう話を紹介している。

最近何人もの大學生がやってきて言うには、『愛、忘れがたきもの』のなかのあの老いらくの戀はまったく可笑い草だ。手を握ったことさえないなんて！ そんなものの愛情のうちに入るものか。』中の一人がさら

に口をへの字に曲げて言うには、「こんな愛情小説はあまりに保守的だ。道徳意識が強過ぎる。」<sup>⑩</sup>

若者たちのこのような批評は、小説發表時と比べるとまさに隔世の感がある。この十年の間に人々の心は大きく變わり、當時は衝撃的だった「愛、忘れがたきもの」も彼らの目には色あせてしまった。ただこの小説が提起している愛の在り方の意義そのものは減じていないと私は思う。この點については後に考察するが、「愛、忘れがたきもの」が、「法律とモラルよりもっとしつかりした、もっと確かな私たちを結び付けるもの」として愛情を捉え、理想的な愛情は存在すると確信していることに注目しておきたい。

#### (四) 結婚による愛の消滅

——張潔「方舟」と諷容「錯、錯、錯」——  
「懶得離婚」——

「愛、忘れがたきもの」に見られる、愛が絶対の價值を有するという觀念と、冒頭に掲げた池莉や徐星における、淡泊なあるいは虚無的な、愛を媒介としない男女の結び付きの在り様との間に、我々は大きな斷絶を感じないではない

られない。ではこれらの小説の間に横たわる十年の歳月で、愛は一舉に冷めてしまったのだろうか。實はそこに至る間には、結婚あるいは結婚生活に對する失望や幻滅が挟み込まれているのである。

八二年には「愛、忘れがたきもの」を書いた同じ張潔が、中篇小説「方舟」(『收穫』八二年二期)で三人の離婚した女の共同生活を描いた(嚴密に言うとうち一人は正式に離婚はしていないが實質的には離婚同然の別居狀態)。離婚した女性がいかに世間から誹謗中傷されるか、女性が自立して事業を成し遂げようとするにはどれほど困難を伴うか、その困難にもかかわらず自己實現と社會への貢獻を目指して女性が多くなると超人的忍耐力で闘っているかをまざまざと見せてくれるこの小説は、現在ではフェミニズム文學<sup>⑪</sup>とみなされ、高い評價を受けている。

愛情と結婚という觀點から見ると、三人の女性の一人曹荊華の場合、結婚はそもそも反動的權威とされた父と妹の生活を助けるための身賣り同然であった。夫は荊華が中絶したのを怒って離婚を迫る。夫にとって妻は寝て子供を生

むためのものでしかない。もう一人の柳泉の場合、結婚以來夫は彼女を金を出して買った物のように毎晩求め、彼女は夜を怖れた。心身共に疲れはてた時も、夫は愛の營みを強要し、妻を性欲の吐け口としか見ていなかった。荊華と柳泉の受けた仕打ちとは、結婚の經濟的動機（生活のため）と性的動機（性欲の充足）を暴露している。では熱烈戀愛から結婚に至った梁倩の場合はどうか。かつて愛し愛され、新婚の頃こそ仲睦まじかったが、ほどなくお互いのペールが剥がれてきて、眞實の決して美しくない魂があらわになると、愛情が消え失せ、おたがいに見限ってしまった。梁倩は別れる決意をするが、夫は高級幹部である岳父の力を利用してしようと正式な離婚に應じない。彼女も父の地位と家柄を考えると、容易に離婚に踏み切れない。そこで二人は紳士協定を結んで不干渉主義でゆくことにした。梁倩のケースは結婚生活によって本來あったはずの愛が消えうるとい

う恐ろしさを提示している。どんなに熱烈な戀愛をしても結婚という形で愛が成就すると、とたんに戀愛ではなくなる。共同生活の中でお互いの醜い面がさらけだされる時、

愛は死滅してしまう。ここには愛を死なせてしまう結婚生活に對する失望と幻滅がある。

八四年の謀容の中篇小説「錯、錯、錯！」（『收穫』八四年二期）も情熱戀愛が結婚生活の中で冷めてしまう悲劇である。小説は病死した妻に夫が語りかける回想というスタイルをとっている。男の亡妻への懺悔と、甘く睦まじかった戀愛時代・新婚時代のロマンチックな思い出がいりまじり、これほどひたむきに愛し愛された二人がどうして憎み合わねばならなかったのかと、胸を締め付けられずにはいられない。

不和の原因は日常生活のごく些細なことから生じた。いさかいと和解を日々繰り返すうちに、しだいに二人は心が離れてゆく。夫はそれでも、女優である妻が體調を維持し、仕事に打ち込めるようにと、家事一切を引き受けて獻身するのだが、夫婦の間の溝は深まってゆくばかりだった。やがて子供が生まれるが、妻が出産・育児は自分の女優としての生命を蝕むと主張したことから、夫は育児も一手に負

うのだが、いさかいは以前にも増して頻繁になる。子供は両親の絶え間ない喧嘩の中で育っていった。冷めきった關係のまま、失った愛を取り戻す機會も見出せずに、二人は年老いてゆく。しかし男は妻が病死した時、「間違っていた！」（原文「錯、錯、錯！」）と叫ぶのだった。

何が間違っていたのか。男は妻の職業のために家事・育児一切をこなして献身したのにもかかわらず（このあたり日本の讀者にとってはうらやましいかぎりである。中國といえども實際にここまでする夫は稀であろう）、美貌と才能に恵まれながら女優として成功しない妻が、精神的な助けを必要としていたのに、夫は外面的な援助しかなかったことが一つ。夫がリアリストで妻がロマンチストであるずれ（たとえば早朝まだ妻が寝ているうちに妻の好物の魚を買出しに行った夫が、歸宅して行列の奮戦ぶりを話すと、目が覚めた時にあなたがそばにいて欲しかったと言う妻によく表れている。普通の男女と逆のタイプ）をお互いに認識していなかったことが一つ。そして何より夫婦の間で愛を語らなくなっていたことが挙げられるだろう。

新時期文學における愛の諸相（三枝）

しかし妻の死によって男は愛を取り戻した。妻が死んでしまつて、愛も恨みも失くした水のように冷たい生活の苦しみから解き放たれてはじめて、なぜあれほど激しく愛し合つた自分たちが憎み合うようになったのか、なぜ愛が冷めきつてしまつたのか、自分に問ひかけることができたのだ。また妻が生きているうちは共通の言葉をなくし、語りかけることもなくなっていたが、死んだ今となつては胸のうちをすべて吐き出すことができたのだ。そしていくら悔やんでもとりかえしがつかないと知りつつも、愛を失くしたまま死なせてしまったことを後悔せずにはいられない。魯迅の「傷逝」を想起させる男の懺悔は、痛切に讀者の胸を打つ。

講容と言えば八〇年の中篇小説「人中年に至れば」（原題「人到中年」『收穫』八〇年一期）で、中年知識人の不遇と献身を描いて大きな反響を呼んだが、その主人公の女醫と技術者の夫との美しい夫婦愛は印象深かった。ところがこの「錯、錯、錯！」では、ロマンチックな愛は現實の結婚生

活には耐えられないという方向に轉換してしまっている。さらに彼女の八八年の中篇小説「別れるのも面倒」(原題「懶得離婚」『解放軍文藝』八八年六期)に到っては、離婚するのも煩わしいという、空恐ろしいものとなる。

若い女性記者方芳は、近年社會問題となっている離婚の現状をリポートしたいと主任に申し出るが、主任はそれに反対なばかりか、逆に彼女に、模範的な夫婦を表彰して社會の安定團結を促進するよう言い渡す。やむなく彼女はある居民委員會の事情通のおばあさんを尋ね、模範的だと太鼓判を押されている夫婦を紹介してもらう。ところが取材を重ねてゆくうちに、表面的には仲睦まじいこの夫婦に實は感情の上での龜裂があることを發見する。夫はかつてある女性と親しくなったのだが、周囲の壓力に負けて交際をやめていた。この夫婦はかつてのようにいさかいこそなくなったが、それは互いに我慢してなんとか折り合っているに過ぎないのだった。

記者方芳の問題意識は明らかに作者諶容のものである。諶容はこの小説で離婚が増えていとはいっても、實際は

世間の風當りが強くてなかなか離婚できないという中國の現状を訴えている。しかも内實の愛の破綻を取り繕って、自分を偽りながら日々を送るという、背筋が寒くなるような、しかし多くの家庭の實態を描いている。作中の夫が夫婦仲を良く保つために擧げる三つの條件、すなわち二間の部屋があること(相手の顔を見なくてもすむ空間を確保する)、日曜毎に友人を招くこと(準備に忙殺されて喧嘩する暇がない)、夫婦がそれぞれ何でも心おきなく話せる友人を持ち、逆に夫婦間では祕密を持つこと(相手に何もかもさらけださないうで自分だけの世界を持つ)を讀んで身につまされるのは、中國の讀者だけではあるまい。「別れても別れなくとも同じさ。別れるのも面倒だ」との言葉には、ロマンチックな愛は結婚生活に耐えられないという現實にたいして、「錯、錯、錯!」のように死によって愛を取り戻すでもなく、はじめから諦めてしまった悟りの境地が見られる。

#### (五) 愛の變遷

こうしてみると、愛を奪っていた文革が終結した結

果、破壊された權威に代わるものとして人々の心に愛が蘇った。新時期文學の初期の頃は愛に對する信頼と情熱があり、愛を至高と考え、理想的な愛・眞實の愛を追求してやまないという眞摯な態度が大勢を占めていた。ところが愛を死なせてしまう結婚生活への幻滅から、愛そのものについて信頼を寄せなくなり、冷めた見方が増えてきたと言えるだろう。若い世代にはそれが刹那的な愛という形で表れている。

文革後愛情が文學に復活した最初の劉心武の「愛情の位置」あたりでは、健康的で美しい愛情が求められ、しかも革命の理想を同じくし、社會主義現代化を促進する愛であることが前提となっていた（たとえば女主人公は技術革新グループに参加しデートを我慢してでも目標達成のために残業する）。つまり愛が崇高であるか否かは黨や革命との關係によって意味づけられている。文革が終結して間もない七八年の段階では、硬直した思考様式に縛られているのは無理もない。これはある意味では人民文學の延長線上にあると言えるだろう。たとえば趙樹理の「小二黒の結婚」（四三年）で、根

據地の農村の若い二人の自由戀愛が民主政府の支持を得て結ばれるように、革命の目標と戀愛の行方が一致していたのと性質を同じくする。後に述べる張弦の小説もこの傾向が強い。

その點張潔の「愛、忘れがたきもの」は、いち早く革命は革命、愛は愛と切り離しはじめている。革命活動の中で自分を助けたために犠牲になった労働者の娘と結婚した男性を賞賛するわけでもなく、むしろ彼の選擇を否定的に描いている。もはや愛に外的權威づけは必要ない。政治と個人の内面の領域を最も徹底的に切り離したのは、おそらく遇羅錦であろう。私小説と分類される所以である。<sup>13</sup>

ところが、革命遂行に役立つ愛が正しいというふうに愛に革命的意義を付與することがなくなり、愛を意味づける權威を喪失すると、何によって崇高さを與えられるかということになる。外にそんなものがない以上、畢竟目は自己内部へ向かわざるを得ない。そこで愛の行方を追ってみると、「方舟」、「錯、錯、錯！」のように愛を死なせてしまう結婚への幻滅が生じる。愛への信頼が揺らいでくると、

しだいに愛に希望を抱かなくなり、「別れるのも面倒」、「愛を語らず」にみられるように、愛に對して冷めた態度を取るようになる。他方、内へ向かった目が、愛と性の營みの本質を探ろうとするとき、人間の業をみすえた王安憶の愛情三部作のようなものが出てくることになるのであろう。この愛の本質の探求については次章で詳しく考察したい。

## 二 愛の描かれ方の分類

——基層・中層・上層・最上層——

### (一) 分類の基準

今まで新时期愛情文學の大きな流れを見てきたが、今度は作品をパターン別に分類してみよう。分類の基準は、基層・中層・上層は愛と愛を妨げるものとの對立の構圖である。愛の成就を妨げるもの、あるいは愛するカップルを引き離すものとしては、封建道徳、新しい政治的身分としての右派、既成の婚姻道徳の三種を考えてみる。

數千年にわたって人々を縛り付けてきた封建道徳は、新中國になっても一朝一夕に拭い去ることのできるものでは

ない。親の決める結婚、寡婦の貞節などは、今だに實際に力を持っており、後れた農村では直接的に威力を振るい、都市でも人々の意識に根強く生きている。愛との對立の最も根底に位置するという意味で、これを基層に分類した。

そのつぎの段階として、新中國になって新しく登場した政治的身分の問題がある。地主や富農といった出身が政治的身分として子孫にも受け継がれるという點で、まさしく世襲の身分制だった。本来ならこの政治的・人爲的に造り出された身分制全體を、取り上げるべきであるが、その中でもより先鋭に愛と對立する右派問題を考えてみたい。右派は五七年の反右派闘争から文革後の名譽回復まで、歴史的にほんの一時期に存在した政治的受難者であるが、それはあたかも現代の賤民のように、右派を愛することはならず、右派と結婚していた者は離婚を餘儀なくされた。そうしなければ自らの政治的純潔を保つことはできなかったのだから。この問題は身分制という點で封建的性質を半ば持ちながら、たとえ親の決める結婚からは自由になったとしても、右派の障壁は乗り越えられないという意味で、中層

に位置付けた。

上層としては既成の婚姻道德と愛との矛盾が考えられる。現代社會では社會主義的婚姻道德であれ、資本主義的婚姻道德であれ、一夫一婦制が基本である。原則として婚姻外の愛は許されない。だから婚姻外の愛は不倫だとして非難されるのである。しかし純粹な愛を結婚という枠にはめられるだろうか。今その問いかけは中國文學でもなされはじめている。

さてここで愛と愛を阻むものの對立の圖式を取り拂ってみよう。何にも妨げられない愛はどうなるのであろうか。對立するものがなければ愛はすばらしく花開くのであろうか。そう考えてくると最上層には愛の本質・永遠性の探求が位置する。つまり外的世界とはいっさい切り離し、より私的な、より觀念的な愛の世界へと向かうのである。

## (二) 基層……反封建

まず、愛情文學の基層には反封建という立場がある。新中國になってもなお残存する封建道德との對立の圖式の中

新時期文學における愛の諸相(二・三枝)

で、愛が障害を克服しようともがいているさまが浮かび上がる。その一つに親の決める結婚、人身賣買のような結婚、自由な戀愛を踏み潰す古い觀念を描いた、張弦<sup>⑧</sup>の短篇小説「愛情に忘れられた片隅」(原題「被愛情遺忘的角落」『上海文學』八〇年一期)がある。ここには母娘三人の三重の愛の不幸が描かれている。母菱花は解放直後に親の決めた結婚を拒否し、新婚姻法に則って自由戀愛で結婚したのにもかかわらず、貧しい山村での長く苦しい生活の末、やはり娘には結納目當ての賣買結婚を押し付けようとする。姉の存妮は、未婚で妊娠したのが發覺して捕らえられ、自ら命を斷った。妹の荒妹は、姉の事件で受けた心の傷によって愛に臆病になる。小説は荒妹が愛情の眞の大切さに目覺め、姉たちの罪が冤罪であったことを悟り、村を豊かにするために力を盡くす共青團支部書記の青年許榮樹のもとへゆくことで未來に展望を持たせている。

「愛情に忘れられた片隅」に描かれた賣買結婚は過去の遺物ではなく、反封建も時代後れではなくて今なお意味を持っている。このことについては、巴金が『隨想錄』の



「賣買婚姻」<sup>⑤</sup>の中で、

「人々は反封建はとつくに時代後れになったと思つてゐる。私も我々はすでに舊時代の惡夢から逃れたと考えていた。あにはからんや、生き残りはいまだに發展し、害毒はなおも擴大しているのだ。賣買結婚に反對し、男尊女卑に反對し、『父母の命、媒妁の言』に反對するために、私は丸々六十年もベンで闘つてきた。

ところが私の姪は今日賣買結婚に直面してなすすべを知らないのだ。二十數年前に彼女が結婚した時は、誰も何も物を要求せず、彼女の結婚に干渉する者もいなかった。しかし彼女の息子は金錢と財物で新しい家庭を築かざるをえない」

と、結婚に莫大な費用がかかり、嫁を買い取るのとならば變わりがない現在の結婚の在り方を嘆いている。

「私は『喜鵲涙』のようなテレビドラマや、『愛情に忘れられた片隅』のような映畫を見たことがある。……何と多くの涙！ 何と多くの苦しみであろうか！ 今朝ラジオで、ある省の八人の娘さんが連名で、自分た

ちが先頭に立つて結婚の自由を勝ち取り傳統と決裂すると唱えているのを耳にした。彼女たちの精神は賞賛に値するし、彼女たちの勇氣は激勵に値する。けれども私は問わざるを得ない。五・四時期の傳統はどこへいったのか。二十年代から五十年代にかけての反封建の傳統はどこへいったのか。どうして今日でも封建的傳統があんなに勢力を誇示しているのか。」

巴金の述懐が示すように、五・四以來長年反封建を叫んで闘つてきたのにもかかわらず、封建的傳統は容易には拂拭できず、今なお姿を變えて人々を害している。それゆえ張弦の反封建の精神に支えられた「愛情に忘れられた片隅」のような文學作品も存在意義を持つており、何をいまさらと退けることはできない。それどころか反封建というテーマは愛情文學の最も基礎になるものである。

張弦は「愛に忘れられた片隅」で愛を抑壓する山村の封建的體質を突いたが、翌年も短篇「未亡人」（『文匯月刊』八一年一期）と「斷ち切れなかつた赤い絲」（原題「擲不斷的紅

絲線」『上海文學』八一年六期）で、續けて愛をめぐる小説を書いている。「未亡人」は市委員會黨書記未亡人周良蕙の許されぬ戀を描き、全篇が亡夫に宛てて心の内を綴った手紙という構成になっている。夫の維明は文革中造反派に捕われて死亡、迫害にさらされ續ける良蕙を終始陰で支え勵ましてくれたのは、郵便配達の男だった。しかし文革終結後亡夫が名譽回復し良蕙も復職すると、彼は自分が郵便配達夫であることを恥じて良蕙を避けるようになる。良蕙はそれでも以前のような親しい關係を持ち續けようとするが、彼女の戀をめぐる様々な噂や臆測が流れ、周囲から壓力がかけられて降格させられる。さらに結婚を決意した二人の前に、一人息子が寡婦と結婚するのを嫌う男の母親と、父親の名譽が傷付けられるのを恐れて再婚に強硬に反對する良蕙の二人の子供が立ちはだかる。

これは寡婦の戀を許さない封建道德が今も執拗に生きていて女性を苦しめていることへの告發である。「私は愛情を必要とするの、夫が要るのよ、遺影じゃなくて、生身の亭主が！」との叫びは、眞に迫っている。ただし作者の主

新時期文學における愛の諸相（三枝）

張が先走りすぎて、文學的鑑賞には耐えない。女主人公の獨白體を採用しているのにもかかわらず、自己辯護が先に立っているため、彼女の内面の苦惱が見えてこない。むしろ張弦自身の脚本による映畫の「未亡人」の方が、許されざる戀を靜かに溫める二人の心の交流の機微が味わい深い。

「未亡人」はもう一つの問題を提起している。それは亡夫と郵便配達人との二通りの愛の在り方である。張弦は故意に二人の社會的地位の間に天と地ほどの差をつけた。看護婦だった良蕙が妻を亡くしたばかりの市委員會副書記と結婚したのは、言ってみれば玉の輿である。そして夫の愛は上位の者が下位の者に與える恩寵のようなものであった。それになんとして郵便配達夫の愛は逆境にあった彼女を支える、人間として對等な愛であった。だからこそ彼女が高位に復職すると自分から身を引こうとしたのだ。良蕙もこれは二度目の戀愛ではなく、初めての本當の戀なのだと悟る。二人の愛の對比は寡婦の戀を正當化するのに役立ち、周囲の中傷や非難の理不盡さを際立たせている。が、逆に言え

ばこんな理屈を加えなければ、寡婦にはごく普通に戀をしごく普通に再婚する自由さえ與えられていないということだ。

總じて張弦は反封建の立場から愛を描いているが、彼の作品は對決構圖が明確で、新中國に残存する封建道徳を拂拭しなければならぬという主張がはっきりしすぎていて、深みに缺ける。愛そのものを深く探求してはいないし、張弦の意圖もそこにはないのだろう。

また、「未亡人」と同じく、寡婦の貞節、すなわち女性だけに一方的に課せられた再婚禁止の封建道徳に縛り付けられて愛が結ばれないというものに、戴厚英<sup>⑩</sup>の『廣州文藝』八二年九(十一期)がある。こちらの寡婦文瑞霞は、「未亡人」の周良蕙のように自覺的な女性ではない。夫が冤罪で死んだ後、饑餓線上にあった母子を救ってくれた劉四に再嫁するのはむしろ自然の成行きであったが、彼女にはその勇氣がなかった。すでに婚姻法が整い、誰も再婚してはならない

と口に出して言うこともないのに、義兄をはじめ周囲の人々が息子を生んだ彼女に再婚を望まないことを感じとって、心惹かれる男性を逃してしまふ(この子は遺腹兒で、もし生まれた子が女だったら婚家を去れるはずだった)。もし舊社會だったらおまえに牌坊を建ててやるところだと賞賛されて満足する女の心に、逃した男の影がちらつく。女性が自分で自分の心を縛ってしまい、貞節を守り抜くという、自分で建てた心の牌坊ほど悲しいものはない。貞節という「やわらかなくさり」の恐ろしさは、魯迅の「祥林嫂」の頃とたいして變わってはいない。ここでの貞節という束縛は「未亡人」よりも深刻である。

その意味では、航鷹の『東方女性』(『上海文學』八三年八期)は、夫の浮氣相手の女性を助けてやり、間に生れた子供を自分の子として育てあげる女主人公が存在感を持っていて、いかにも我々東方の國の女性だなあという感慨を與える。このように自分たちの心の奥深くにまで根を下ろし、しかも今なお美德とされることの方が、傳統的な觀念の根強さを感じさせる。

張弦のもう一つの作品「断ち切れなかった赤い絲」もやはり愛について二つの問題を提起している。一つは中層に分類される「天雲山傳奇」と同じく、右派という政治的身分が夫婦を引き裂くもの。もう一つは組織による包辦婚姻（請け負い結婚。普通は親の決めた結婚を指す）。親の命ならぬ組織の命による結婚の強要は新しい衣を着た古い封建的體質の表れに他ならない。主人公の傅玉潔は十七歳の女子學生の時、あふれんばかりの情熱を抱いて解放軍の部隊の文工團に入るが、年老いた醜い副師團長に見染められ、組織部長の半ば強制的な説得を受ける。その時はきっぱりと求婚を断わったものの、後に夫と離婚した玉潔は、妻を病氣で亡くしたこの老軍人と再婚して豊かな生活を得、男と女を結ぶ赤い絲は切れていなかったと思うのだった。ずいぶん身勝手な女性に描かれているが、讀者に彼女をそこまで追いつめたものに憤慨させるよう、故意に反面教師的存在に仕立てあげられている。

組織の包辦婚姻は「断ち切れなかった赤い絲」ではその時は實現しなかったが、解放戦争當時、戦争で婚期を逸し

た地位の高い軍人のために、黨組織に依頼して若い女性を半ば強制的に結婚させることがあったらしいのは、諶容の中篇小説「楊月月とサルトルの研究」（原題「楊月月與薩特之研究」『人民文學』八三年八期）でも描かれていることから分かる。この小説では、革命に對する情熱に燃えていた若い女性楊月月が、家庭に入らされ、子供ができて身動きが取れなくなつて落伍してゆき、ついには夫に愛人ができて離婚の憂目を見る。まるで丁玲が「國際婦人デーに感あり」（原題「三八節有感」四二年）で取り上げた女性の運命を地味くような話で、自分の意志通りに人生を切り開いてゆくことができな（諶容はそれを實存主義に對する疑問として投げかけている）、女性に生れたが故の不自由の悲劇である。諶容は夫を斷罪するようなことはせず、楊月月の苦惱、夫の苦惱、息子の苦惱、そして今は妻の座に納まった愛人の苦惱まで、それぞれの人生を、調査にきた作家の目を通して重層的に掘り下げており、全體を作家と作家の夫との往復書簡集で構成した形式上の試みと實存主義の探求に加えて、諶容獨特の心の琴線に觸れる筆使いによって、小説と

してかなり優れた作品となっている。

金錢至上主義的戀愛觀、家柄を重んじる結婚を描いた小説なども、基層に分類してよからう。「愛情の位置」、「愛を語らず」がこれに入る。他にも高級幹部の門地主義への反發が見られる白樺の短篇「一束の手紙」(原題「一束信封」『人民文學』八〇年一期)など、數多くの小説がこれらの問題を取り扱っている。新しい衣をきて姿を變えた封建的傳統の力は強く、純粹な愛情の行く手に立ちはだかっているのである。

### (三) 中層……新しい政治的身分、右派

つぎに中層として、新しく登場した政治的身分、とりわけ右派分子の問題がある。右派問題を取り上げる小説も多いが、愛情との關係では、黨を盲信する無邪氣さであれ、保身のためであれ、戀人や配偶者を捨てざるを得なかった悲劇において、二人の間にあったはずの愛情が犠牲になっている。

七九年からは文革が人々の心に殘した傷跡を見つめる傷痕文學に止まらずに、五〇年代の反右派鬭争や大躍進政策にまでさかのぼって問ひ直したいわゆる反思文學が出てくるが、その中で初めて右派分子をとりあげたのは魯彥周の中篇小説「天雲山傳奇」(『清明』七九年一期)である。これは右派問題の告發という意味以外に、愛情と政治的身分との葛藤という問題を突き付けたという點で意義深い。この小説は「黨」を盲信する少女が、反右派鬭争で右派と斷罪された戀人を捨て、二十年後に悔恨の念にかられるという、社會主義中國で新たに作り出された右派という政治的身分が戀愛を破壊してしまった悲劇である。こういうケースは實際に數多くあったであろうし、これ以後も多くの作品でとりあげられてゆく。

王蒙の中篇小説「蝴蝶」(『十月』八〇年四期)では愛はサブ・テーマにすぎないが、右派とされた妻との離婚が主人公の心に深い傷を負わせている。張弦の「斷ち切れなかった赤い絲」では、夫が右派として批判された時は、愛情をよりどころにして苦難に耐えていたが、右派のレッテルを

外された後も「摘帽右派」（レッテルを外された右派）として迫害が続く中で、夫がしだいに自尊心をなくしてゆくのに愛想をつかして離婚する。夫には酷だが、斷固とした盲信や保身よりもこちらの方が人情に近い。これらは結婚愛の破綻である。實際さらに文革の嵐の中では一線を劃すると稱して離婚が急増した。盲信のためであれ保身のためであれ、政治によって多くの愛が死んだのである。この政治によって引き裂かれた人間と愛のテーマは戴厚英の長篇小説「ああ、人間よ」（原題「人啊、人！」）八〇年十一月廣東人民出版社）で成熟をみることになる。

#### （四） 上層……婚姻道德と愛

上層としては、既成の婚姻道德と愛との矛盾がある。これには結婚外の愛と、愛のない結婚が、常にペアとなって表れる。この問題で最初に論争を巻き起こしたのは、先にも觸れた張潔の「愛、忘れがたきもの」であった。賛成者はほとんどがエンゲルスの「愛情にもとづく結婚のみが道德にかなう」（「家族、私有財産、および國家の起源」という言

葉を引用して論據とする。反對者は婚姻外の愛を不道德だと非難し、格調が低いとか、（老幹部の正義感と階級的友愛による結婚を否定的に描いているので）革命道德を冒瀆するものだとする。

だがこういう表面的な議論とは別に、小説の中で作者が訴えている主張を検討してみよう。張潔は三十歳になっても結婚を躊躇っている女主人公の娘の珊珊に、母たちのように婚姻と愛情が分離する悲劇を繰り返さぬよう、魂に呼び掛ける人が現れるまで待つ決心をさせている。ここには純粹な愛情によるものでない結婚への批判、世間の獨身者に對する中傷への反論がある。つまり結婚を押し付けようとする社會に反發している。愛情によって結び付いた結婚でも崩壊しうるのを描くのは「方舟」になってからだが、「愛、忘れがたきもの」の段階では、主人公たちに結婚という枠を超えて、更には生身の相手の人間をも超えて、魂だけの純粹な愛を貫かせている。結婚による結び付きに意義を見出さず、愛の對象となる人間の存在さえも必要とせず、愛そのものに絶對的な價值を與えている以上、それは妻子あ

る男性を愛して不道德だなどという非難の次元を超えている。

張潔は八四年の中篇小説「エメラルド」(原題「祖母緑」

『花城』八四年三期)では、愛を貫くために結婚を拒む女性を造り出した。女主人公の曾令兒は、ある大學で反右派闘争の時、愛する左威をかばって自分が大字報を書いたと言いつ張り、右派分子として邊境へ勞働改造にやらされることになった。一夜限りの決心で左威に抱かれた彼女は一人で邊境へ旅立つが、そのたった一晚のことで妊娠してしまっていた。愛する人の子を宿しているという思いが迫害される日々の辛さから彼女を救う。妊娠したことは左威に告げず、他人にも父の名を明かさなかった。私生兒を生んだことといっそうひどい仕打ちを受けたが、子供と數學の研究を心の支えに生きてきた。一方左威は同じく大學の同級生で黨支部書記の盧北河と結婚する。彼らの家庭は、外見は整っているが内實は崩壊寸前で、氷のように冷たい。曾令兒と再會した盧北河が語る、二艘の船のたとえ。順風満帆

の豪華な船が盧北河、運命の荒波に揉まれるおんぼろ船が曾令兒。だが盧北河の船は轉覆してしまう。幸福であるかに見えた盧北河は、實は愛のない生活に落ち込んでしまったのだ。

張潔はここで盧北河の愛のない結婚と曾令兒の結婚外の愛を對比させている。曾令兒は結婚という形で結ばれるのを拒んだことで、愛を死なせずにすんだ。が、盧北河は結婚によって逆に愛を死滅させてしまったのだ。この「エメラルド」でもそうだが、總じて張潔には、結婚生活に對する幻滅が見られる「方舟」とともに、結婚と愛とを無關係なものとして捉える傾向がある。

張潔の「愛、忘れがたきもの」に續いて、婚姻道德と愛の問題で波紋を投げかけたのは、先に「愛する權利」を書いた張抗抗の中篇小説「オーロラ」(原題「北極光」「收穫」八一年三期)である。ただし婚姻外の愛といっても、すでに結婚登記を済ませてあること、つまり法律上は夫婦であることは、目立たないように滑り込ませてあるだけである。

一讀した限りでは、凡庸な婚約者との結婚に氣乗りのしない女性が結婚式が近付くにつれしだいに憂鬱になり、別の男性二人に次々と心ひかれ、眞の愛と理想を求めて結婚を拒否する、と讀める書き方である。つまり未婚の女性がフイアンセをふる話に思える。だが實際はもう法的に夫婦なのだ。婚約を解消するだけなら道德的にさほど大きな問題はないであろう。理想を追求する若者の青春物語として受けいられる(題名のオーロラは理想の象徴)。しかし作者が意圖的に二人を結婚登記後に設定してあることは重要だ。張抗抗自身は次のように語っている。

「既婚女性が異性と交際してはいけないという法律はどこにもありません。(中略)自分の愛していない人と無理に一緒に暮らすのは、他者と自己に對する責任を負わない不道德な行爲であると(主人公は)認識するに至ったのです。このような不道德な行爲が彼女に與える苦しみは、傅雲祥との決裂が招く『不道德』を擔うことによる非難がもたらす苦惱を、實際すではるかに越えているのです。(中略)もちろん、結局どの道德

新時期文學における愛の諸相(三枝)

觀念がより社會の發展規律に合致するかは、なお、苓苓と彼女の友人たちが、正に前進し變化しつつある生活の中で、實踐の檢證を受けるのを待たねばなりません。」<sup>⑧</sup>

これはかなり過激な發言で、既成の婚姻道德を排斥し、新たな道德の生れるのに期待する姿勢が讀み取れる。現在の若者なら違和感はないだろうが、八一年の段階では作者の問題意識がかなり先行していたと思われる。主人公が既婚であることを氣付きにくいように書いたのもそのせいかも知れない。

小説に登場する傅雲祥・費淵・曾儲の三人の男性は、それぞれ、凡庸で世俗的、思索するが利己的な虛無主義者、國家と人民のために力を盡くして幸福を勝ち取ろうという信念を持つ正義漢という風に、はっきりとタイプが別れていて、三つの世界觀を代表している。主人公の苓苓が順に對象を移すということは、後者ほど優れているという作者の價值觀の表れである。ここで曾儲が最も立派な人物であるから、苓苓が最後に彼を選択するのは大いに正しいなど



と論じて何にもなりはしないだろう。むしろ登場人物をこのように典型に書き分けてその善惡を讀者に押し付けるのは、文學としての幅や奥行きを自ら狭めているようなものである。張抗抗もやはり人民文學の桎梏から脱け出せなかったのだろうか。婚姻外の愛という極めて先鋭な問題を取り上げながら、ごく平凡な結末を讀者に豫感させるのは、それが彼女の誠實さの表れであつたとしても、何かしら失望を感じざるをえない。

婚姻外の愛で社會的に最も注目されたのは遇羅錦の長篇小説「春の童話」(原題「春天的童話」『花城』八二年一期)である。これは兄の遇羅克が「出身論」を書いて銃殺された後、一家の生活のために東北の農民と身賣り同然の結婚、初夜のショックからナイフを身につけて寝て夫を拒否、別の男性への愛、子供を捨てて離婚、戀人との愛の破局と續く遇羅錦の體驗を綴つた「ある冬の童話」(原題「一個冬天的童話」『當代』八〇年三期)の續篇である。「春の童話」では、北京に戻って労働者と再婚、妻子ある新聞副編集長との戀

愛、夫との離婚訴訟、愛人の裏切り、その報復のため作品の中でのラブレター公開に至る。發表された當時は現實の離婚訴訟と不倫の相手の失脚がだぶってスキャンダラスに取り沙汰されたが、中國では時機尙早だったという不運の他は、非難されるほどの内容ではない。そもそも彼女の愛の在り方について言えば、愛の成就のために、夫と正式に離婚した上で再婚という正當な手段を取る、極めてオーソドックスなものである。遇羅錦の戀愛結婚觀は、結婚愛を至善とする點でむしろ倫理を逸脱するものではなかった。

茹志鵲の娘で、母娘ともに活躍している王安憶が、八六年から愛情三部作と言える「荒山の戀」(原題「荒山之戀」『十月』八六年四期)、「小さな町の戀」(原題「小城之戀」『上海文學』八六年八期)、「錦綉谷の戀」(原題「錦綉谷之戀」『鍾山』八七年一期)の中篇三作の力作に取り組んだ。王安憶は農村を描いた「小鮑莊」(『中國作家』八五年二期)で童養媳の戀と寡婦の戀を扱っていて、許されざる愛を考える兆しが見えるけれども、この三作では人間における愛と性のい

となみの業のような部分をみすえた、重いものとなっている。

三作のうち「荒山の戀」と「錦綉谷の戀」は既婚男女の婚姻外の愛を描く。「荒山の戀」は、手法的にも斬新な仕立て方で、一・二章では出身地も育った過程も異なる主人公の男女を、それぞれの生い立ちから、大人へと成長し、各々が結婚するまでを、全く無關係に交互に筆を進めてゆく。したがって二人の人生は二章までは平行線を辿る。しかし運命の絲は徐々に二人を引き寄せ、第三章では、今まで出会うことなく生きてきたこの男と女が、ついに悲劇となる出會いを迎える。二人は自分たちの意志に反してどうしようもなく惹きつけられ、人目を盗んでは求めあい、その關係が露見しても、もはや離れられない。苦しみぬいた末、男は女に誘われるままに荒れた山に登り、毒をあおいで心中する。この小説は、理性の力では抑えようがなく、運命にあらがうことができない愛の恐ろしささえ感じさせる。この男女はお互いに精神的に相手を必要としたわけではない。むしろそれぞれの配偶者と子供たちでなる家庭に、

雙方満足していたのである。自分でもなぜ相手を欲するか分らないのだ。それはいわゆる愛情とは違うが、ただの肉欲かというところでもない。肉體の交わりだけでなくやはり相手の存在そのものを欲してやまない。職場の降格處分を受けようと、各々の夫や妻に妨害されようと、惹きあい求めあう二人をどうにも止めることができない。まさしく宿命としか言いようがない。

「荒山の戀」と「小さな町の戀」が性愛に重點がおかれているのにたいして、「錦綉谷の戀」の方は精神面での結び付きが強い。しかも廬山という俗世界を離れた山上の場を設定し、神祕的な裸の魂のふれあい、沈黙のうちの心の通い合いを描く。この愛は、あたかも下界では愛を實現するのは不可能であるかのごとく、廬山を下りた途端に夢か幻のように消え失せる。そして女主人公は何事もなかったかのように夫の待つ家へと歸り着き、冷めた夫婦關係を續けるのである。彼女には不倫であることの罪の意識はさらさない。愛は法を超越し、さらには現實世界をも超越している。

王安憶のこれらの婚姻外の愛は、形式的には愛と婚姻道徳が對立する構圖を取るが、實は婚姻道徳は何ほどの力も持ちえていない。「荒山の戀」では、確かに婚姻關係が桎梏となって二人を心中に追いやるのだが、宿命的に結び付いた二人には自分たち以外の如何なるものも無力である。

「錦綉谷の戀」では、下山すると實にあっさり元の家庭にもどり、一見婚姻道徳に屈服しているように思える。しかし、

「夫はこの晩彼らが實は三人で寄り添っていたことを夢にも思わなかった。三人で、二人ではない。これからの長い年月、ずっと三人である。二人で平和に暮らすのではない。風波は立つはずがない。第三の人間がその場にいないことであらゆる悶着は雲散霧消してしまふ。」

とあるように、愛の冷めた結婚を容認しているだけである。この結婚を解消してまで別の戀を成就させる氣は毛頭ない。「夫婦の間のすべてはあまりにあからさまで」「何もかも平凡になってしまう」から、結婚に期待はしていない。「彼

らは愛情は距離を保つてこそ消滅しないでいられるということをよく知っていた」から、下界では會うどころか手紙も交わさない。「彼と彼女は、必ず神聖なほど清らかな環境で出會わなければならず、決して細々したことに煩わされてはならない。そうしてはじめて對話できる」ので、ベッドの上で靜かに相手に思いをはせるだけである。それは婚姻道徳に縛られているのではなく、むしろ結婚を無意味なもの、愛を損なう障害物とみなしている。つかのまの愛が夢だったという書き方だが、ひょっとすると日常生活の方が夢で、裸の魂が向き合ったつかのまの愛が眞實だったのかもしれない。

### (五) 最上層……愛の本質、永遠の愛

より私的な、より觀念的な

これまでみてきた基層・中層・上層は、愛と愛を阻むものの對立の圖式であり、愛を抑壓しているものがなければ、愛はすばらしく花開くはずだという前提が暗黙の内にあった。ところが對立の圖式を離れた最上層では、政治信念の

消失・結婚に對する幻滅を経て、愛を外的世界と切り離し、愛の本質と永遠性の探求がなされている。つまりより私的なより觀念的な愛の世界を指向している。

上層の項の王安憶の愛情三部作のうち、「荒山の戀」は人間の理性では抑えることのできない愛の宿命的性質を捉えていた。先に觸れなかった「小さな町の戀」は同じく人間の理性で抑えられない情欲のすさまじさをえぐっている。

「小さな町の戀」の主人公は子供の時から同じ劇團で一緒にバレエの練習をしてきた一組の若い男女である。思春期になって女性を性的に意識しはじめた男が、それを隠そうとして二人の間に亀裂を生じ、仇敵のような間柄となる。ところが苦しみの果てに結び付いた後は、どうにも抑制できない情欲の虜となって、もはや離れようにも離れられない。

こうした肉欲に支配された關係は、二人に自己を汚れたものとして意識させ、その後悔の念は、たがいに相手を抹殺したいという憎しみをさえ生じさせる。男と女はこの苦しみから逃れようと互いに避けるようになるが、公演の旅先ではふたたび人目を盗んで求め合う。情欲を満たすこ

とも恥辱をはらすことも、そのはけ口を相手に求めるしかない二人は、不倶戴天の敵のように殴り合わずにはいられない。こうして憎んでは求め、求めては憎むことを繰り返すうちに罪の意識はますます深くなってゆく。ついに女は死を決意するが死にきれない。そんな彼女を救ったのは、自分の體に宿った小さな命だった。それは彼女の情欲の炎を消し去り、一人で汚名を着て私生児のまま子供を生み落とした。男はしかし、他の女と結婚して去っていった。

この小説の、情欲が人間を突き動かす力の大きさと、求めては罪の意識で憎み合い、相手を抹殺せんばかりの愛憎のすさまじさは、ゾラの「テレーズ・ラカン」を髣髴とさせる。ただ新たな生命の誕生による淨化を與えているところにわずかに救いがあるが。

王安憶の「荒山の戀」と「小さな町の戀」の宿命的愛やすさまじい情欲の行き着く處は、自らを破滅に追いやる人間の業であらう。

張潔の「愛、忘れがたきもの」と「エメラルド」の、結

婚はおろか生身の相手をさえ必要としない愛は、それゆえに永遠の命を手に入れることができた。

「愛、忘れがたきもの」の珊瑚の母は、相手の男性と愛を語る代りにノートに語り続け、「母の精神は日夜彼と一緒に、まるで仲睦まじい夫婦のようだった。ところが、彼らが一生のうちに接觸した時間は、合わせても二十四時間を越えはしないのだ。しかしこの二十四時間は、おそらく他の人が一生の間に受け取るものよりも、ずっと深く、ずっと多い」ほどの愛を得られた。「それは心に刻み込まれたものだ。それは愛なんかじゃなくて、激しい苦痛、あるいは死よりもっと強い力だ。もし世の中にいわゆる不滅の愛が本當にあるとしたら、これがその窮極にほかならない。」彼女の愛は結婚によって成就することはなく、また相手の男性の死という障害にぶつかった。しかしまさにそのゆえに、この愛が消滅することなく、永遠のものとなりえたのではなからうか。

「エメラルド」の曾令兒は世間的な幸福を得られなかったにもかかわらず、なぜ幸せだったと言えるのか。それは

彼女が左威との結婚を拒否したからに他ならない。恩返しという義務的な結婚を受け入れていたら、愛を守り抜くことができたかどうか疑わしい。むしろ結婚しなかったからこそ、左威の代りに彼との愛の證である息子の中に愛を見出し、常に甦らせ、生かし続けることで、どのような苦難も乗り越えてこられたのである。彼女にはもはや現實の相手さえ必要でない。かつて狂わんばかりに愛し、その愛のために喜んで犠牲となり、限らない愛を抱き続けたことで、極度に精神的な崇高な愛へと高められたといえる。この點で小説の最後に挿入されているエピソードは示唆的である。曾令兒が汽車の中で知り合った新婚旅行中の夫婦が、大雨の中を海に泳ぎに出て、新郎が溺れ死んでしまう。新婦は後を追おうとして人々に引き留められ睡眠薬を飲まされて眠っている。曾令兒は新婦が目を見ましたらこう言おうと思っている。新婦はたとえ一日でも報われる愛を得たのだから幸せであると。この夫婦は、結婚生活であるいは死滅してしまうかもしれない愛が、死というもっとも大きな障害によって、かえって永遠の命を得ることができたの

だ。「愛、忘れがたきもの」と「エメラルド」の主人公の愛のありかたとこの新婚夫婦のエピソードは、永遠の愛というテーマについて考えさせる。

そもそも愛は永遠なるや否やを考えてみる時、現實世界でめでたく結ばれてしまつては、いずれ愛は冷め、永遠の愛など不可能であろう。その意味で神仙世界のような山上を設定し、その場に限りて愛を成り立たせた王安憶の「錦綉谷の戀」も、現實世界での結ばれた愛の永遠性に疑問を持つものであらう。

また結ばれた愛に對する懷疑からは、死はむしろ不滅の愛を手に入れさせる最も確實な保障となる。「荒山の戀」の心中の結末を安易だとする見方もあるが、彼らの宿命的愛は死によつて成就されるしかあるまい。「愛、忘れがたきもの」の相手の男性の死も、「エメラルド」の新婚夫婦の新郎の死も、愛に永遠の命を與えた。謀容の「錯、錯、錯！」は、二人の愛し方がすれちがつたために、結婚生活の中でとうとう愛をなくしてしまつた。ところが、妻の死

に直面して、夫は悔恨の思いを亡き妻に語りかける。相手の死によつて彼は失つた愛を取り戻したのだ。死という人と人との間に横たわる最大の障壁は、愛というものを考える時、それを永遠に燃え立たせ、輝きを與える、最高の恩寵であるのかもしれない。

## 結 び

以上新時期愛情文學をその流れとパターン別に分類して考察してきたが、現代の文學に表れた愛の在り方の全體像がおぼろげながら見えてきたように思われる。まず基本は愛に對する外的意味付けを拒否する態度である。例えば初期には社會主義中國の建設、四つの現代化促進に貢獻する形の愛が賞賛されていたのが、しだいに政治的意義を問わなくなる。また右派や反革命との愛は許されないという政治的制限が加えられたことに反發する。あるいは封建道德が生き残つて社會主義道德に姿を變え、離婚・再婚の不由、獨身主義の否定となつて人々を、とりわけ女性を壓迫していることを糾弾する。本來きわめて個人的な領域のも

のであるはずの愛を政治的・道德的に外から規制することに抵抗する姿勢が全體に見られる。個人の内面にはいかなる束縛も加えられるべきではなく、一人の人間が誰をどのよう愛せようと全く自由である、というのがあるべき社會の理想像と考えていいだろう。

それがさらに既存の婚姻道德にも向けられ、愛に結婚という足かせをはめることから生じる矛盾がとりあげられる。

「愛情にもとづく結婚」という幻想さえ崩れつつある。結婚生活の中で愛が消えうるとすれば、愛の冷めた、あるいは愛のない結婚を冷やかに容認するとともに、婚姻外の愛を罪惡感なく求めることになる。かといって中國の場合、事實上婚姻制度の枠はしっかりしており、最近離婚が急増しているとはいえ、法律婚が前提となっているため、より自由な男女の結び付きが可能な形態になりにくい。そこでむしろ愛に現實逃避させ、生身の相手を不要とする自己完結的な愛の世界を築き上げたり、死の斷絶によって愛を成就させることで、愛に崇高さ、永遠性を與えようとしているのではないだろうか。それが眞理であるかどうかはとも

かく、一つの方角ではある。

註

- ① 女。一九五七年、湖北省僑桃市に生まれる。高校卒業後、農村に下放し教師となる。七六年冶金醫學專科學校の「七・二一」工人大學に合格。卒業後、醫師として武漢鋼鐵公司衛生處に配屬される。八三年武漢大學中文系に合格。八六年まで學ぶ。八二年中國作家協會湖北分會に加入。現在、武漢市文聯の月刊誌『芳草』の編集者。

- ② 「煩惱人生」を轉載した『小説選刊』一九八七年十一期は編集者の言を附して、作者がごく普通の人間の日常生活の平凡な細々した事柄の中に「小説」を発見したことを高く評價している。また「太陽出世」を掲載した『鍾山』九〇年四期は、于可訓の「人生的禮儀——讀『太陽出世』兼談池莉的人生三部曲」と題する評論を「太陽出世」の後に添え、そこでは池莉の人生三部作を新寫實主義と捉えている。

- ③ 男。一九四二年、四川省成都市に生まれる。幼年期は重慶で過ごし、五〇年に北京に移る。六一年に北京師範專科學校を卒業。以後七六年まで十五年間、北京第十三中學の教師を勤める。七七年、『人民文學』十一期に發表した「班主任」が文革後の新しい文學の出発点となった。七六年から文藝雜誌『十月』の編集に攜わり、八七年から『人民文學』主編。現在中國作家協會理事。その他の主な作品に、中篇小説「如

意」(『十月』八〇年三期)、長篇小説「鐘鼓樓」(『當代』八四年五・六期)、紀實小説「五・一九長鏡頭」(『人民文學』八五年七期)、「公共汽車詠嘆調」(『人民文學』八五年十二期)などがある。

④ 中國新時期小説鑑賞叢書『愛情小説選』一九八八年七月寧夏人民出版社。

⑤ なおラジオ局へ届いた二千五百通餘りの投書のうち、劉心武と相談して選んだ二十五通餘りの手紙が『讓我們來討論愛情』と題して出版されており(一九七九年三月上海人民出版社)、全國各地の様々な人の體驗談と意見が收められていて興味深い。

⑥ 女。一九五〇年、浙江省杭州市に生まれる。両親は四〇年代初期から革命に参加した知識人で、文學好きの両親の影響下に、小學校五年生の時の作文「我們學做醫生」が上海の『少年文藝』に掲載されるなど、早くから創作を始めた。六六年初級中學卒業後、紅衛兵運動に積極的に参加する。六九年、黑龍江省北大荒の農場への下放を志願、八年間の農場での生活で様々な仕事を經驗する。七六年に農場を離れ、黑龍江省藝術學校編劇班で学ぶ。七九年中國作家協會黑龍江分會に加入、專業作家となる。主な作品に、短篇小説「夏」(『人民文學』八〇年五期)、中篇小説「淡淡的晨霧」(『收穫』八〇年三期)、「北極光」(『收穫』八一年三期)、「塔」(『收穫』八三年三期)、長篇小説「隱形伴侶」(作家出版社八六年)など

新時期文學における愛の諸相(三枝)

どがある。

⑦ 張抗抗「從西子湖到北大荒」(『中青年作家自傳』一九八八年十二月時代文藝出版社)。

⑧ 女。一九三七年、北京に生まれる。張潔が幼い頃、父は妻子を置去りにした。抗日戰爭中母子は桂林・四川・陝西を轉々とし、陝西の農村で解放を迎えた。その後遼寧省撫順に移り、五六年に撫順高級中學を卒業、中國人民大學計劃統計系に入學。六〇年、人民大學を卒業。國務院第一機械工業部に入る。六九年に下放し、五・七幹部學校に入る。七二年、北京に戻り元の職場に復歸。七八年、子供の頃からかわいがってもらった駱賓基に勵まされて處女短篇小説「從森林裏來的孩子」を書き、好評を博す。七九年中國作家協會に加入、現在理事。主な作品に、短篇小説「愛、是不能忘記的」(『北京文藝』七九年十一期)、長篇小説「沈重的翅膀」(『十月』八一年四・五期)、中編小説「方舟」(『收穫』八二年二期)、「七巧板」(『花城』八三年一期)、「祖母綠」(『花城』八四年三期)、短篇小説「他有甚麼病」(『鍾山』八六年四期)、長篇小説「只有一個太陽」(作家出版社八九年)などがある。

なお張潔はこのころ「有一個青年」(『北京文藝』七九年一期)、「未了錄」(『十月』八〇年五期)、「波西米亞花瓶」(『花城』八一年四期)と續けて純愛路線で書いている。「沈重的翅膀」で社會經濟を描いて作風を變えた。

⑨ 當時の贊成論としては、黃秋耘「關於張潔作品的斷想」(『文



藝報』八〇年一期)、戴晴「不能用一種色彩描繪生活」(『光明日報』八〇年五月二八日)などが、また批判としては、李希凡「倘若眞有所謂天國……」(『文藝報』八〇年五期)、肖林「試談『愛、是不能忘記的』格調問題」(『光明日報』八〇年五月一四日)、曾鎮南「愛的美感爲甚麼幻滅?」(『光明日報』八〇年七月二日)などがある。

⑩ 註④に同じ。

⑪ 女性の問題を深く掘り下げた文學という、廣義でこの言葉を用いた。中國の女性解放の歴史と照らし合せて、文學に表れた各段階の典型的な女性像として、封建禮教の犠牲となった女性、あるいは目覺めた新女性がよくとりあげられる。

たとえば現代文學では魯迅の「祝福」の祥林嫂、「傷逝」の子君、丁玲の「莎菲女士的日記」の莎菲、「我在霞村的時候」の貞貞などがある。その路線を受け繼ぐものとして、文革後では張潔の「方舟」と、張辛欣の「在同一地平線上」(『收穫』八一年六期、結婚と女性の自立の板挟みを描いた)がフェミニズム文學に數えられる。この女性解放の視點から論じたものに、中國では、翟大炳「關於文學中的婦女問題——談『方舟』及其批評」(『山花』八二年十二期)、夏中義「從祥林嫂、莎菲女士到『方舟』」(『當代文藝思潮』八三年五期、日本では福地桂子「張潔の『方舟』に見る中國女性解放の現實」『長崎総合科學大學紀要』第二六卷第一號一九八五年度、秋山洋子「三つの視點——中國現代の女性作家たち——」『女性

學年報』第九號一九八八年(「在同一地平線上」を論じる)などがある。

⑫ 女。本名譚德容。一九三六年、湖北省漢口に生まれる。父は國民黨政府の高等法院・最高法院の裁判官をつとめた。一歳の時に日中戦争が起こり、成都・重慶・北平等を轉々とし、四七年、重慶に戻る。五一年、一五歳の時、重慶の西南工人出版社門市部の販賣員となる。翌年、『西南工人日報』社讀者來信部に移る。このころ、中學・高校の課程を獨學で學ぶ。五四年、北京ロシア語專科學校に入學。五六年、共青团に入團。五七年に卒業後、中央人民廣播電臺に配屬され、ロシア語の翻譯と錄音編集を擔當するが、病氣でよく倒れる。六二年、北京市教育局に移る。六三年から翌年にかけて、自費で山西省の農村に滞在。北京に戻ってから話劇を書くが、文革が始まると上演中止となる。六九年からは北京郊外の通縣に下放。長篇小説「萬年青」執筆(七五年に人民文學出版社より出版)。七三年北京に戻り、北京市第五中學のロシア語教師となる。七九年、中國作家協會に加入、現在理事。八〇年、中篇小説「人到中年」(『收穫』八〇年一期)で注目を浴びる。その他の主な作品に、長篇小説「光明與黑暗」(人民文學出版社七八年)、「永遠是春天」(『收穫』七九年三期)、中篇小説「太子村的祕密」(『當代』八二年四期)、「楊月月與薩特之研究」(『人民文學』八三年八期)、「錯、錯、錯!」(『收穫』八四年二期)、「懶得離婚」(『解放軍文藝』八八年六期)

などがある。

- ⑬ 加々美光行氏『私小説』作家・遇羅錦における政治と文學『ある冬の童話』一九八六年十二月田畑書店 日本近代文學と比較して、「およそ國家秩序によって捕捉されえない私的領域というものが存在しうる」(丸山眞男)近代の開幕が「私小説」の成立を可能にするという意味で、遇羅錦の小説を「私小説」に数える。

また「中國新時期文學の一〇年」中國研究所編『中國年鑑』一九八七年版別冊では、「體驗を告白することで世間の『常識』に挑戦したという意味で」私小説に分類している。

- ⑭ 男。一九三四年、上海に生まれる。本名張新華。南京市第五中學を卒業後、五三年に清華大學に入學し、冶金機械專修科で學ぶ。卒業後、遼寧省鞍山鋼鐵設計公司以技師となり、創作も始める。五七年、反右派闘争の際右派とされ、翌五八年湖南・安徽の農村に下放。六〇年、安徽省馬鞍山鋼鐵設計院に配屬される。六三年、馬鞍山市文化局の戯曲作家となる。七二〜七五年安徽省の農村に下放。七九年に復権。八三年中國作家協會江蘇分會に加入。主な作品に、短篇小説「記憶」(『人民文學』七九年三期)、「被愛情遺忘的角落」(『上海文學』八〇年一期)、「未亡人」(『文匯月刊』八一年一期)、「掙不斷的紅絲線」(『上海文學』八一年六期)、「銀杏樹」(『鍾山』八二年二期)などがある。脚本には、「青春萬歲」(王蒙の同名の小説を映畫化したもの)、「湘女蕭蕭」(沈從文の小説「蕭

新時期文學における愛の諸相 (三枝)

蕭」を映畫化したもの)、「被愛情遺忘的角落」、「秋天里的春天」(「未亡人」を映畫化したもの)などがある。

- ⑮ 三聯書店香港分店七九年初版。引用は生活・讀書・新知三聯書店の八七年出版の合訂本によった。

- ⑯ 女。一九三八年、安徽省潁上縣南照集生まれ。父は店員で、後に小さな雜貨店を開いた。母は文盲の主婦。故郷で中學教育を終え、五六年に上海の華東師範大學中文系に入學。六〇年に卒業。上海作家協會文學研究所に配屬され、文學評論と文學理論の研究をした。六六年の夏に積極的に文革に参加したが、まもなく右傾として批判された。父も右派とされており、苦難をなめた。七九年一月上海復旦大學中文系講師。主な作品に長篇小説「詩人之死」(八二年福建人民出版社。處女作だが出版が遅れ、第二作の「人啊、人!」の方が先に出版された)、「人啊、人!」(八〇年十一月廣東人民出版社)、中篇小説「鎖鏈、是柔軟的」(『廣州文藝』八二年九月〜十二月)などがある。

- ⑰ 男。一九二八年、安徽省巢縣魯集村の農民の家に生まれる。邊鄙な貧しい村で學校もなく、私塾で學ぶ。抗日戦争後外に出て學問をしたくて、縣城の補習班に入る。四六年夏高級中學に入學。四八年夏に私立の國學專科學校に轉校するが、二箇月で生活費がなくなり、歸郷する。まもなく革命に参加。渡江戦役の後、華東大學皖北分校で學ぶ。五〇年皖北行政公署文教處、皖北文聯を経て、五二年安徽文聯に移る。主に編

集活動を行なう一方、創作を始める。映畫脚本や話劇を數多く書く。文革中筆を奪われるが、七七年より創作再開。七九年の中篇小説「天雲山傳奇」が正面から反右派闘争の問題を描いて反響を呼んだ。現在中國作家協會理事、安徽文聯副主席。

⑱ 張抗抗「我寫『北極光』」《文匯月刊》八二年四期。

⑲ 女。一九四六年、北京に生まれる。両親は日本留學生で、五七年の反右派闘争で二人とも右派とされた。六一年到北京女子十二中學を卒業、北京工藝美術學校へ進學。六五年に卒業後、市の玩具第六工場で見習い工として働く。文革が始まると両親は再び批判され、弟二人は陝西省の農村へ下放。兄の遇羅克は六七年に發表した「出身論」で血統主義を批判したため、六八年一月に反革命罪で逮捕され、七〇年に銃殺された。遇羅錦自身も六六年に日記の中の言葉が原因で勞働改造三年の刑を受け、七〇年三月に刑期を終え河北省臨西縣に移ったが、一家の貧困を解決するため北大荒の農民と身賣り同然の結婚をし、男兒を生んだ。七四年に離婚。七八年九月北京に戻り、七九年四月に名譽回復、職場復歸。七八年七月に瓦工と再婚したが、『光明日報』副編集長と戀愛し、八〇年五月に離婚を提訴。八一年五月正式離婚。八〇年九月、最初の結婚から離婚にいたる自己の經歷を赤裸々に描いた處女作「一個冬天的童話」（『當代』八〇年三期）で大きな反響を呼ぶ。副編集長との戀愛を描いた續篇「春天的童話」「花城」

八二年一期）は「スキヤンダル文學」（隱私文學）として激しい非難を浴びた。八二年七月に三度目の結婚をし、「求索」『個舊文藝』八三年四期）でその経緯を綴る。八六年初め西ドイツ訪問、三月ボンで政治亡命。

⑳ 女。一九五四年、南京に生まれる。母は作家の茹志鵬。翌五五年、母とともに上海に移る。六九年、初級中學卒業（學校では一度も授業は行なわれなかった）。七〇年、安徽省淮北の人民公社に下放。七二年、徐州地區の文工團の團員に合格し、チェロを弾く。七八年、中國作家協會上海分會に加入。同年四月、中國作家協會第五期文學講習班で學ぶ。主な作品に、短篇小説「雨、沙沙沙」（『北京文藝』八〇年六期）、「本次列車終點」（『上海文學』八一年一〇期）、中篇小説「流逝」（『鍾山』八二年六期）、「小鮑莊」（『中國作家』八五年二期）、「荒山之戀」（『十月』八六年四期）、「小城之戀」（『上海文學』八六年八期）、「錦綉谷之戀」（『鍾山』八七年一期）などがある。

㉑ 通稱「三戀」。題材のほかに、三作ともセリフがほとんどないこと、登場人物に名前がなく「他」と「她」でしか表されないこと（したがって非常に讀みにくい。こういう作家の獨り善がりな果たして讀者に受けいられるのか疑問である）でも共通している。

# 新時期愛情文學年表

(網羅的ではなく、本文で論及したものに限る)

一九七八年 劉心武「愛情的位置」『十月』七八年一期

一九七九年 張抗抗「愛的權利」『收穫』七九年二期

魯彥周「天雲山傳奇」『清明』七九年一期

張潔「愛、是不能忘記的」

『北京文藝』七九年十一期

一九八〇年 張弦「被愛情遺忘的角落」

『上海文學』八〇年一期

遇羅錦「一個冬天的童話」

『當代』八〇年三期

戴厚英「人啊、人！」

廣東人民出版社 八〇年十一月

一九八一年 張弦「未亡人」『文匯月刊』八一年一期

『掙不斷的紅絲線』

『上海文學』八一年六期

張抗抗「北極光」

『收穫』八一年三期

一九八二年 遇羅錦「春天的童話」『花城』八二年一期

張潔「方舟」『收穫』八二年二期

戴厚英「鎖鏈、是柔軟的」

『廣州文藝』八二年九、十一期

一九八四年 譚容「錯、錯、錯！」

『收穫』八四年二期

新時期文學における愛の諸相 (三校)

張潔「祖母綠」『花城』八四年三期

一九八五年 徐星「無主題變奏」『人民文學』八五年七期

一九八六年 王安憶「荒山之戀」『十月』八六年四期

『小城之戀』『上海文學』八六年八期

徐星「殉道者」『人民文學』八六年二期

一九八七年 王安憶「錦綉谷之戀」『鍾山』八七年一期

一九八八年 譚容「懶得離婚」『解放軍文藝』八八年六期

一九八九年 池莉「不談愛情」『上海文學』八九年一期

## 參考文獻

『中國「新時期文學」の一〇八人』

中國文藝研究會 八六年十月

『當代中國作家百人傳』 求實出版社 八九年六月

『中國當代青年女作家評傳』 中國婦女出版社 九〇年六月